

ソ連歴史学界におけるロシア帝国主義論争

中村 平八

本資料は、ソヴェトの歴史学界におけるロシア帝国主義論争を回顧した論稿である。この共同論文の執筆者は、アメリカ合衆国の三名の歴史家である（G・エンティーン、T・ゴーン、C・カーン）。西側の学者ではなく、ソ連の学者の当該論文を紹介したかったが、紹介に値するものがなく、残念である。ソ連における歴史研究、とりわけ現代史研究、ロシア・ソヴェト史研究は、多年にわたり、国家権力（スターリン主義）によって統制・弾圧されつづけたため、時代の試練に耐えうるような研究業績はきわめて少ない。ロシア資本主義・帝国主義史の研究もまた例外ではない。⁽¹⁾

ソ連社会は、一九八〇年代後半の現在、ペレストロイカの時代に突入しており、学問研究もまたペレストロイカを迫られている。歴史学の分野では、「歴史の空白」と「歪曲」は許されないということで、保守・革新両派の激しい応酬がつづいている。ペレストロイカに入ってからまだ日が浅いため、具体的な研究業績は現われていない。ロシア資本主義・帝国主義史研究、論争史研究の本格的なモノグラフが現われるには、いまだ少し時間が必要であろう。それまでは、ここに紹介するアメリカの学者たちの仕事も、一定の意義をもちつづけるものと思われる。

さて本資料を紹介するにあたって、われわれの問題意識を若干披瀝しておきたい。かねてわれわれは、一九一七年

の十月革命によって誕生したソ連社会主義は、マルクスの意味での社会主義ではなく、それとは性格のちがう発展途上社会主義（途上国型社会主義）だとする見解を主張してきた。この見地からすれば、十月革命を招来した旧ロシア資本主義もまた、マルクスの意味での資本主義ではない、ということになる。われわれはロシア資本主義史の専門家ではないが、ソ連社会主義論、さらに現存社会主義論の専門家としては、論理的にこう言わざるをえない。もちろん、われわれの説は少数説であり、内外の研究者の支持をえていない。多数説は、「ロシア資本主義→ソ連社会主義」を「マルクスの資本主義→マルクスの社会主義」と把握している。これとはちがって、われわれは、「ロシア資本主義→ソ連社会主義」を「従属的資本主義→発展途上社会主義」と認識する。⁽²⁾

多数説をとるにせよ、少数説をとるにせよ、あるいは第三の説を主張する場合でも、ソ連社会主義を研究するにあたっては、それに先行するロシア資本主義の研究が必至となる。では当のソ連の歴史家たちは、この問題をどのように考えてきたのだろうか。すでに述べたように、ソ連の歴史学界あるいは経済史学界には、ロシア資本主義・帝国主義論争史を扱ったスタンダードな著作が存在しない。したがって、アメリカの学者エンティーンらの論文は、ロシア帝国主義論争を簡潔に俯瞰した仕事として、参考にしてよい文献の一つだと思われる。

本資料でエンティーンらは、ロシア帝国主義論争の始期を一九二〇年代のネップの時期、終期をスターリン批判後の一九六〇年代前半とし、これを五つの段階に分けて、それぞれの段階における論争を紹介している。各段階における論争点は多岐にわたるが、論争をつらぬく基調は、ロシア帝国主義の「従属性」と「自立性」をめぐる論争であった。「終期」としてのスターリン批判後のフルシチョフ時代は、ソ連の歴史学界が「教条主義」の呪縛から解放されたかにみえた一時代であったが、そこでは、スターリン時代のロシア帝国主義「従属論」が否定され、「自立論」が勝利を収めた。

われわれはこの結論に不満である。われわれの考えの積極的展開は別の機会にゆずるが、ここでは次ぎの点のみを指摘しておきたい。それは、ソ連におけるロシア帝國主義論争の参加者の議論には、世界資本主義論からの見地がまったく欠落していたという事実である。世界資本主義の規定性を棚上げした、一国史的発達史観にもとづく国民経済論の見地からの各国資本主義研究は、当該資本主義の本質把握を誤らせるおそれが多分にある。誤解を避けるために述べておくが、スターリンは、われわれと同じく「従属」説を主張したが、その論拠は世界資本主義論の見地にもとづくものではなく、御都合主義的な政治主義によるものであって、学問的説得力を欠くものであった。

新たなロシア資本主義研究は、世界資本主義論の見地からなされるべきであろう。その点で、従来のロシア資本主義研究（各国資本主義研究）は、方法的に重大な欠陥を有していたと言わざるをえない。すなわち、ロシアにおける資本主義発達史の研究で、独占資本主義の成立を論証し、さらに国家独占資本主義への移行を論証して、社会主義革命の勝利の合法則性を論証するというソ連経済史学の方法はまちがっているのである。

世界資本主義論の見地とは、簡単に言えば、十六世紀に誕生し、十九世紀の産業革命によって確立した世界資本主義（世界的分業システムの成立・展開、そのもとでの資本蓄積の不均等な進行と蓄積様式の変化）の体制に、ロシア資本主義（各国資本主義）は決定的に条件づけられ、規定されていた、とする方法論の見地である。そこでは、支配―従属、中心―周辺というカテゴリーが重要な意義をもつ。

世界資本主義論の見地からわれわれが主張するように、ロシア資本主義は従属的資本主義であって、ロシア十月革命は「社会主義革命」ではなく、「社会主義をめざす社会革命」であったとしても、十月革命の世界史的意義は、いささかも減ずることはない。かえって、十月革命をマルクスの意味での「社会主義革命」と強弁することこそ、非科学的であり、ひとびとを混乱させ、ロシア十月革命の世界史的意義を抹殺してしまうのである。

時の国家権力の意向に左右されずに、かつてマルクスがやったように、経済学批判、社会科学批判をきちんと行い、その成果にもとづいてロシア資本主義の研究が再開されることをソ連の学者たちに期待したい。

(1) 国家権力(スターリン主義)による歴史学への介入については、以下の文献を参照されたい。和田春樹編『ペレストロイカを読む——再生を求めるソ連社会』(御茶の水書房、一九八七年)、I 歴史の真実を求めて。和田春樹『私の見たペレストロイカ』(岩波書店、一九八七年)、とくにⅣ 六〇年代の遺産、Ⅷ 歴史の中のペレストロイカ。和田春樹編『ロシア史の新しい世界』(山川出版社、一九八六年)のなかの和田『一九四一年六月二十二日——歴史家と軍部』。宇高基輔・和田春樹「ロシアにおける国家独占資本主義——ソヴェト史学の最近の動向について」嘉治真三編『独占資本の研究』(東京大学出版会、一九六三年)。和田春樹「転換するソ連歴史学」東京大学社会科学研究所『社会科学研究』第三十七巻第五号、一九八五年十二月。ミハイル・ゲフェル「スターリンは昨日死んだ——ペレストロイカとスターリン問題」『世界』一九八八年三月号。ミハイル・シャトロフ「歴史的眞実をよびもどす舞台」『世界』一九八八年六月号。

(2) 中村平八『発展途上社会主義の研究』(白桃書房、一九八八年)、第一章 現存社会主義の予備的考察、第二章 近代世界の展開と現存社会主義。

翻訳に際して使用したテキストは、George M. Enten, Tatiana Gorn, Cheryl Kern, Soviet Historians and the Study of Russian Imperialism (The Pennsylvania State University Press, 1979), X+60 pp. である。テキストに付されている英訳のゲフェル論文「ロシア帝国主義」は、正確を期するため原典の『ソヴェト歴史百科事典』第五巻、モスクワ、一九六四年、露文から邦訳した。